あっと言う間に『去る3月』

不退転

第137号
東江中学校
校長　神元 勉

3月は、卒業式・修了式・離任式・送別会などの仲間や先輩・後輩・先生方との別れの『去る3月』、あっと言う間に過ぎてしまいます。『立つ鳥跡を濁さず』『有終の美』を飾ってほしいものです。

朝の『読み語り』⑪

3月1日(水)の朝の読書の時間に、今年度最後11回目の読み語りがありました。今回も高校入試を控えた3学年を除き、1・2学年で実施しました。

■1年1組…辺土名喜美枝さん（SSW）
■1年2組…仲村　睦与（ちかよ）さん（地域の方）
■1年3組…上里　幸彦　さん（保護者）
■2年1組…山入端里南　さん（読書推進委員）
■2年2組…金城　隆弥　さん（読書推進委員）
■2年3組…照喜名香織　さん（保護者）

仲村睦与さんの読み語り

①琉球新報 2月27日『金口木舌』
　下の記事です。
②「皇帝にもらった花のたね」
　とても分かりやすくシンプルな絵本
③「ありがとう」
　色々な事に感謝の心を持てる絵本

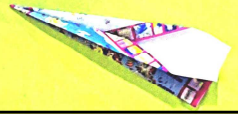
琉球新報 2017年2月27日

金口木舌

手書きの文字。得点が入ると手作業で入れ替えられるスコアボード。県内でも電光掲示板が主流になる中、今も残る「昭和感」がファンには人気だった▼北海道日本ハムファイターズが1軍キャンプを行う名護市営球場だ。40年前の1977年に開場した。沖縄初のプロ野球キャンプ地として、日ハムが利用を始めたのは翌78年だ▼古い施設には「味」がある。だが、老朽化に伴い、球団や利用者から設備の充実を求められるのも致し方ない。新築を前提に、現在の球場は3月から取り壊しが始まる▼「ファイターズを支えてもらった。選手もいろいろな思い出があると思う」。日ハム1軍の2次キャンプが始まった12日、栗山英樹監督が思いを語った。球場への愛着を感じた。日本一の球団に見送られて球場も幸せだろう▼プロ野球のキャンプだけではない。名護市営球場は北部地域の野球の「聖地」として親しまれてきた。関係者によると、学童野球の選手にとってこの球場の黒土でユニホームを汚すことは憧れでもあった▼25日のセレモニーで名座喜少年野球の久高凌（りょう）将（ま）主将は「ここでのプレーを思い続けてきた。（新球場では）優勝旗を持ってダイヤモンドを一周したい」と決意を述べた。3年後に生まれ変わる。さらに多くの子どもたちがユニホームを汚しながら夢を追い掛けるに違いない。

卒業式

谷川　俊太郎

ひらげたままじゃ持ちにくいから
きみはそれをまるめてしまう
まるめたままじゃつまらないから
きみはそれをのぞいてみる
小さな丸い穴のむこう
笑っているいじめっ子
知らん顔の女の子
光っている先生のはげあたま
まわっている春の太陽
そしてそれらのもっとむこう
きみは見る
星雲のようにこんとんとして
しかもまぶしいもの
教科書には決してのっていず
蛍の光で照らしてみても
窓の雪ですかしてみても
正体をあらわさない
そのくせきみをどこまでも
いざなうもの
卒業証書の望遠鏡でのぞく
きみの未来

書…読書推進委員・玉木　日菜